

# 極東からシルクロード経由ヨーロッパへ

ERINA経済交流部部長代理 佐藤 尚

6月下旬から7月中旬にかけて、いくつかの調査のため標記ルートを走破した。訪問地域の3分の2は北東アジア地域ではないが、隣接する地域との比較において北東アジアを見てみたいと感じ、非北東アジア地域も含め報告したい。視察、訪問の詳細はそれぞれの報告書に記載する取り決めがあるので、ここでは感じたこと、遭遇した出来事を述べることにする。

## ウラジオストク

日本海側ではなじみの都市であり、種々の報告がなされているため今回も特に多くは述べないが、ひとつだけ気付いた点がある。市外にあるアルチョム空港からウラジオストクに伸びる道路上を走行する車の速度が以前より遅くなり、また無茶な追い越し、車線変更が見られなくなった点である。3月に発足したプーチン政権は法遵守を強力に打ち出しているが、その姿勢が運転者のマナーにも反映されたものと感じられた。日本からの対口投資が進捗しない大きな原因のひとつが法整備の不備、朝令暮改的な法律、実務現場での係官の勝手な法の運用が指摘されるが、この道路交通法の遵守が他の法律、特に貿易・投資関係でも見られるとなれば、日本からの投資増大が見込めるのでは、と考えた。

一方、法律の厳格な運用は、問題も引き起こす。今回筆者はあまりにも多くの機関を訪問するため、先方訪問先からの招聘状取付が必要で、取得までに膨大な時間を要する業務査証を避け、迅速な発給が行われる観光査証でのロシア入国を計った。ところがウラジオストク入国の際これが問題となり、「ロシア訪問目的の虚偽申告」にあたりとされ、一時は国外退去も言い渡された。何とか解決したが、確かに法律の厳格な解釈からいけば、筆者はロシアの法を犯し、相応の処遇に値したが、このような厳格な対応は23年間ロシア（含む旧ソ連）訪問をしているが、初めてのことであった。

国の将来を考えると、あるいは広大なロシア全体を考慮すると、「弾力的運用」から不正が再発することが危惧される。現在ロシアに必要なことは、法を全国一律に、厳格に運用することであろう。ロシアにはやはりイワン雷帝やスターリン等強大な権力を有する指導者が必要であり、独裁者ではなく厳格な法が支配するとすれば、それはそれな

りに歓迎すべき新局面であると思った。

## ハバロフスク

ウラジオストク同様日本には関係の深い都市である。昨年10月完成した鉄道・道路併用橋を渡った（鉄道部分の運行は1998年開始）。全長3,882m。シベリア鉄道は全線が開通してはや100年にもなろうとするが、極東とヨーロッパロシアを結ぶ道路は現在までない。アムール川に道路橋がないことも一因であったが、これは今回の開通で取り除かれた。現在最難所であるアムール州とチタ州間で道路建設が進行中であり、一部では完成したとも伝えられる。最後まで残った部分は広大な山岳湿原地帯（尾瀬ヶ原の数百倍もの規模）で、路盤整備が大変な区間である。しかしこの区間が開通することにより、極東から欧州まで車で走破することが可能になる。物理的には、日本からフェリーで車を運び、ウラジオストクに上陸し、欧州までドライブが可能になるのである。これは少し先の話になるが、パリ＝ダカルラリーを真似て東京＝パリ・シベリア横断ラリーさえ可能になるのである。

## ブレヤ

なじみのない名前であるが、多くの日本兵が強制労働のため抑留された場所である。今回は水力発電所建設現場の視察のため訪問した。この建設は旧ソ連崩壊後、日本の公的融資第一号案件と目されており、現在日本の融資によるF/S（事業化調査）が実施されている。この発電所はハバロフスク州、アムール州の電力需要に応える目的と同時に、隣接する中国黒龍江省への売電計画もあり、ロシアの外貨獲得、あるいは北東アジアの電力供給網上重要なプロジェクトとなっている。2003年までに200万kWの発電規模が予定されている。ブレヤとはアムール川の支流の名前であり、下流に設置されているニジネブレイスカヤ発電所は既に稼動しており、同じく200万kWの発電能力を有する。

## ブラゴヴェシensk

アムール州の州都である。人口22万。旧ソ連時代は外国人の訪問が禁止されていた。アムール川を隔てた対岸の黒龍江省の黒河までは、ほんの数百メートルであり、1960年代の中ソ国境紛争は雰囲気はかなり緊迫していたものと思

われる。現在では多くのロシア人が対岸を目指し、日用雑貨を買い求めている。逆に中国人は雑貨販売のためロシアを訪問している。

大豆研究所：ブラゴベシェンスクにはロシア農業・食品省所属の大豆研究所がある。隣接の黒龍江省の大豆は日本でも有名であり、輸入が検討されているが、アムール州南部でも大豆が栽培されている。一部日本の商社、自治体がアムール州産大豆の輸入を視野に入れているが、少量輸入では輸送費がかかりすぎ商業ベースには乗らない。

朝の酔っ払い：宿泊ホテルで朝食をとるべく、唯一営業中のビュッフェに入った。「電気コンロ用電源不調につき、温かいものは出せない」との返事。（注：ロシアでは電気コンロが普通。220ボルトのため日本より熱量は多く、慣れるとそれほど不便を感じない。ガスコンロは皆無）「乾きものか、冷凍食品のみ出せる」との返答。チーズやソーセージ、干した魚とくれば、しょうがないビールでも注文し、テーブルへ。隣のテーブルではロシア人二人がビールではなくウォッカを飲んでた。話し掛けてきたので、聞くと一人は自動車部品会社社長、一人は公安。社長さんいわく「仕事は大変だが、面白い。今日は朝からウォッカを引っ掛けているが、これは偶然会った友人を歓迎するため。普段は仕事に差し支えるため、アルコールはやらない。」公安氏いわく「おまえは関東軍の満州での行状を知っているか？」とかなりメートルも上がり、最初から敵対的な物言い。小生「侵略行為ではあった。」公安氏「そうだろう、日本は常に侵略的で、北方領土返還などもってのほか。」社長さん制していわく「朝からこんな過去の遺物を押し付けて済まない。小さい会社ではあるが、がんばっている。市場経済もわかってきた。日本は中国以上に大切な教師である。どうか気を悪くしないで欲しい。」この社長さんのような人間が増えればロシアはよくなると感じた。

## 黒河

対岸のブラゴベシェンスクと比較し、熱気と活気が段違い。人口10万。ただし、流動人口は多く実質は15万人程。ロシア語の中国人女性ガイドに町を案内してもらった。夫は外航船団の船員で年間3ヶ月ほどしか黒河におらず、従兄弟は東京で日本語を勉強しながら働いているとの話であった。なぜロシア語を勉強したか聞いてみたが返事は奮っていた。「ロシアは中国なしでは経済を発展することは出来ない。特に極東ではそうだ。日本はその経済規模、技術力はすばらしいが、領土問題で本腰を入れられない。韓国が極東ロシアを担うには国、経済規模が小さすぎる。どうしても中国に頼らざるを得ない。だからロシア語は必要に

なると考え選択した。」小生「ロシア側は中国人の進出に一種の恐怖感を抱いており、あの手この手で中国人の流入を抑えているが、思い通りにはなかなかいかないのでは？」答えていわく「清朝初期まで東北アジアは中国の領土であり、弱体化した清朝を脅かし帝政ロシアは領土を割譲した。しかし100年、200年の時代の長さで見れば極東地域は中国のものであり、中国人は実質的にこの地の経済を支配するであろう。実質的支配の後、法的にどうなるかは知らないが、世界各国のチャイナタウンを形成した中国人を排除することなどできない。日本も50年、100年のスパンで北方領土返還を考えたらいかがですか。」

## ハルビン

ウラジオストク同様日本海側ではおなじみの都市である。今回は黒河からウルムチへ向かう通過地点として訪問した。ハルビン鉄道管理局外事弁公室と面談をした。中国東北三省への日本企業の進出、投資が難しい理由の一つに輸送の問題がある。中国鉄道部の地方支局であるハルビン鉄道局と、ロシア鉄道省の同じく地方支局、極東鉄道（本部ハバロフスク）が共同し、北東アジア地域で小回りの効く輸送網を構築すればかなり問題は解決できるのでは、と考え意見を述べた。中国側も興味を示したが、問題の要は日本からどれくらいの貨物が見込めるかにあると返答された。国際間の話し合いは中央同士の会談が最初にあり、大枠決定後、当事者、当該地域に降ろされる。この問題を北京とモスクワに持ち込んだなら、優先順位が低いとして、議題に上らないであろうが、十分な貨物量の確保（これは日本側が提供できる点ではあるが）により地方間で国を跨ぐ案件実現も可能であるとの感を得た。

同じ話はハバロフスクでも行い、やはり保証される貨物量が問題で、恒常的に一定量の貨物があれば議論に値するとの感触を得ている。東京にとって北東アジア地域向け貨物量の増大、確保といった問題は些細なもので、優先順位が低いと感じられるであろう。しかしいつまでも太平洋対岸（北米）重視を続けられないであろう。近隣地域である北東アジアの問題を、日本がイニシアチブを持って対処する時代が来ているのである。

## 中国・カザフスタン国境越

アジアと欧州を結ぶ鉄道輸送ルートCLB（チャイナランドブリッジ）委託調査の一環で鉄路国境を越えた。カザフスタンについては関係者からトラブルが発生する旨注意されていたので、それなりの用心はした。通常、列車での国境越えの際、検査は車内で実施される。旅券審査は順当に

行われ、税関検査の番になったコンパートメント内を隅から隅まで、一部ドライバーでボルトをはずしてまでチェックした。別に違法なこともしていないので平然と検査を見ていた。最後に税関申告書を提出、所持金額を申告した。と、おもむろに、法令のコピーが提示された。「1999年9月19日発効外為法規定。第3国人はカザフスタン入国に際し、所持される交換可能な非自国通貨の1%を税関検査の名目にて支払わなければならない。」この場合日本円（日本人にとっては自国通貨）中国元（国際金融市場において交換可能ではない）は含まれず、米ドルがこれに該当する。所持金の400米ドルの1%、4ドルを上納した。

後でよくよく考えてみると法律のコピーはかなり怪しいと言わざるを得ない。そのような法律があるとしても、適用の場面が異なるのではと勘ぐった。どうりで詳細に隅々まで検査をするし、何よりもこのような地の果てで税関員と法律論争をしても勝ち目はなく、素直に要求を受けざるを得なかった。

### カザフスタン入国

入国の際は4ドルを取られたが、出国時には入国の轍を踏まないと誓った。法律上カザフスタンに48時間以上滞在する場合、各入管事務所で滞在手続きをしなければならぬ。旅行社やホテルでも代行してくれるが、数十ドルとかなりの手数料がかかる。それに登録料自体（数十ドル？）も高額である。今回は朝の10時前後に入国し、翌々日の8時頃出国したのであり、48時間は割るが、かなり微妙なタイミングであった。いずれにせよ入国スタンプに時刻の記載はなく、日付の記載のみである。

最悪を想定し、事前に作戦を考えた。中国発国際列車の切符は手元にあり、都合よいことに、ロシア語でも少し表記がある。ホテルに一泊でも滞在したとなると、ホテル一泊＝2日＝48時間と悪意に解釈される可能性があり、宿泊を伴わない「通過」で押しきることにした。

案の定空港の出国検査場では、何回か旅行者と係官の口論が聞かれた。「なぜ滞在手続きをしなかった。」「そんな法律は知らなかった。」「罰金300米ドルだ。」こちらの番になり、やはり同じ詰問が「なぜ滞在手続きをしなかった！」答えた「カザフスタンは通過である。ここにウルムチ発の列車の切符がある。この日付からわかるように、カザフスタンでのホテル滞在は不可能である。」切符を提示したが、

係官には肝心な部分が中国語でわからない。上司と相談していたが、書類上の不備はないため、そのまま出国スタンプを押し、無事検査を通過。公務員の給与が低すぎるのか、モラルの問題か、不明であるが、出入国が不快な国に、観光はおろか、ビジネスも難しいと思った。

### カザン

モスクワの東方約1,000km。タタールスタン共和国の首都で人口110万人。非ロシア人の国である。中世モスクワ等ヨーロッパロシアを支配したモンゴル人の末裔がここに首都を置いた。いわゆるキプチャク汗国である。一見したところロシア人とタタール人の区別はつかないが、人当たりはずっと洗練されている。この民族性ゆえ商売にも向いており、工業製品生産の才もある。1996年民主的手続きの中の選挙としては最高の96%の支持率をもって、現シャイミーロフ大統領が当選した。大統領府一丸となって、西側からの投資誘致に熱心であり、同じ東洋系との感から日本に対する思い入れも相当なものがある。

今回は同共和国企業の製品を日本に紹介するセミナー実施にあたり、打ち合わせに訪問した。紹介を予定している製品はチタン製の医療機器であり、エリツィン前大統領の心臓手術を執刀した西側の外科医がその優秀性に驚愕したという製品である。この企業の社長と面談したが、得るところがあった。欧米と堅調にビジネスを行っている。しかし、アジアには足がかりもないため、まず日本企業と関係を樹立したい。最終目標は中国であり、日本企業と一緒に販売・製品開発を行いながら中国に販売するといった発想が気に入った。

カザン訪問は、NGOの日本＝タタールスタン文化協会の手配で訪問したが、活発な活動に驚いた。NGOではあるが、自国の経済関係省、在モスクワ日本大使館、在口日本企業にも積極的に働きかけ、タタールスタンへの日本企業誘致に奮闘している。このような団体は極東に欲しいものである、と言ったら、ロシア極東でどのような団体が日本企業とのパートナーシップ形成に努力しているかと聞かれた。また極東に進出した日本企業が企業乗っ取り等、不正ビジネスの標的になっていることも知っており、苦々しく思っているとも語った。日本から7,000キロも離れたウラル山脈の南側、カザンから秋波が送られていることに何らかの形で応えなくてはと思った次第である。